

先端アートデザイン分科会

日時：7月15日(土) 13時30分～15時00分

会場A：宿坊 恵光院

テーマ：宇宙とテクノロジーとデザイン 主管：吉本英樹

会場B：宿坊 報恩院

テーマ：自然と共生するまちづくり～里山から聖域・霊場まで～ 主管：近藤薫

会場C：金剛峯寺会議室

テーマ：包摂社会のためのコデザイン 主管：伊藤節

先端アートデザイン展示

日時：7月13日(木)～16日(日) 場所：金剛峯寺別殿

「KOYA」木桶による花器、ワインクーラー

伊藤節・伊藤志信(デザイナー)、中川周士(木桶職人・中川木工芸・比良工房主宰) / 2023年

ネイチャーセントードデザインをコンセプトに、自然の創り出した造形に寄り添いながら、熟練木工職人の匠の技を融合させた、高野嶺による三つの器
協力：中川木工芸・比良工房、開化堂

「DAWN」

吉本英樹(アーティスト)、株式会社箱一(製作) / 2023年

金沢が誇る箱の伝統と、最先端の特殊レーザー加工技術の組み合わせにより実現した、光と箱の唯一無二の芸術作品。
協力：石川県



高野山会議2022 蟠龍庭をのぞむ別殿でのアート展示の様子、四季の花を描いた襖絵との調和が注目を集めた

SESSION 04 高野山のまちと人 統括：吉本英樹

日時：7月15日(土) 15時30分～17時30分 場所：金剛峯寺大会議室

まちづくり / 地域コミュニティ / 伝統文化 / 教育

セッション概要

開創1200年を超えて、なお現在進行形で進化しつづける宗教都市、高野山—アカデミックな視点から高野山を語るとき、当然のことながら、仏教・密教の教え、ということは中心的なテーマになりますが、このセッションでは、その高野山を「まち」としての側面から捉え、四季折々の中に見られる高野山ならではの風景、そこに暮らす人々の生活、高野山のまちに息づいてきた伝統文化、それらを次代へと繋いでいく子供たちの教育、などのポイントを中心に、議論します。

一山境内地、高野山全体が総本山金剛峯寺という一つのお寺であるという構造の中で、その「お寺」の中には、宗務に直接的に関わらない沢山の人も暮らしています。そこには高野山独自に発展してきた伝統文化—様々なものづくりや、食、華道、書道などの有形無形の受け継がれてきたもの—があり、また欧米を中心に世界中から熱心な観光客が集まる大観光都市の一面があり、地元の子供たちのための教育があり、インフラがあり、行政があります。そして、そのように宗務に直接的に関わっていない人もまた、弘法大師様に思いを寄せ、その求心力によって高野山というまちが、他のどの都市とも違う、唯一無二の性格をもったものを形づくってきているのだろうと感じます。このまちや、コミュニティには、非常に独特な関係性や時間軸があります。まちと人々という視点から、高野山の中身に迫り、専門家の皆さんとディスカッションを展開していきます。

ゲストスピーカーとしてご登壇頂くのは、高野山報恩院住職、学校法人高野山学園法人本部長を務められ、『新・高野百景』の著者としても知られる山口文章氏、東京大学まちづくり研究室教授で、当該分野で日本を代表する研究者である小泉秀樹氏、東京大学大学院工学系研究科先端学際工学専攻博士後期課程3年生で小泉秀樹氏の研究室に所属する浦井亮太郎氏の3氏です。僧侶、まちづくり研究者、教育者、デザイナー、そして現地の住民としての目線を掛け合わせながら、新たな気づきを探っていきます。このセッションを終えたあと、聴講して頂いた皆さんが高野山のまちを歩いた時、目に入ってくる風景に対して感じるものが、ぐっと深まり、高野山にまた新しい魅力を発見できるような、そのようなセッションになればと思います。

「1200年後の世界」とのかかわり

1200年という時間軸で一つの「まち」について考えてみると、人も変わり、政治も変わり、まちの輪郭・領域も変わり、まちの姿は大きく変わっていくものでしょう。対して山上という孤高の台地において、弘法大師という一人の絶対的なカリスマのもとに1200年のあいだ祈りが捧げられ続けてきた高野山という場所は、他とは異なるまちの性格が育ってきているだろうと感じます。それを議論することは、そのように非常に長いタイムスパンでの未来を想像し、変わらないもの、変えてはいけないものは何かということについて、思案するためのヒントを得られるのではないかと考えます。

【ホスト & ゲスト】 吉本英樹 / 山口文章 / 小泉秀樹 / 浦井亮太郎

SESSION 05 瞑想：自然と一体化した境地 統括：神崎亮平

日時：7月16日(日) 9時00分～11時00分 場所：大師教会大講堂

瞑想 / 空海 / 瑜伽 / メタバース / DAO

セッション概要

いま時代は大きく動き、“物”や“ところ”もそのかたちを変えつつあります。私たち人類は自然を利用することでおおきな恩恵を受けてきました。しかし、これまでの自然の過剰な利用や負荷により、資源やエネルギーの枯渇、さらには環境破壊による異常気象など地球規模の課題を生み出しています。人類の安寧を未来まで持続させていくためには、これまでのように人間を中心に自然を利用するのではなく、人も自然の一部であり、自然のなかのあらゆるものとの関係の中でわたしたちは生かされているという、自然を中心とした視座の転回が必要となっています。

先端アートデザイン分野では、人間を中心とした視座から、自然を中心とした視座に転回することで、普遍的な価値をもつモノやコトが生まれ、本来人がもつ“ところ”に気づくことができると考えています。これは空海的な世界観に相似し、多様性や包摂性が求められる現在の複雑な社会における課題解決におおきな意味を持ちます。また、人が本来持つ「ところ」のありかたを見つめなおすうえでも大切です。

このような考えを実践するため、高野山大学と先端研先端アートデザイン分野では、「マンダラプロジェクト」を立ち上げ、約1200年前に空海が体得した世界観を瞑想（自然と一体化した瑜伽の境地）を通して、現代社会に生命を営む人類が体験することで、自然とつながり、生命の大切さを感じ、人本来の「ところ」に気づくことで、Well-Beingな社会の実現に向けた発信を目指しています。

このプロジェクトではまた、あらゆる方が自然と一体化する世界観を体験できるきっかけをつくるため、仏教的、また瞑想的世界をメタバースを通して構築し発信することを目指しています。

このセッションでは、「マンダラプロジェクト」を紹介するとともに、本プロジェクトの発案者であり、密教学を専門とする高野山大学副学長・教授 松長潤慶氏と、高野山学園顧問 乾龍仁氏のお二人に「瞑想」についてのお話をいただくとともに、このような世界観のメタバース世界において表現する現状、課題などについて、富士通株式会社 藤原和博氏にご紹介いただきます。その後、仏教学、文化人類学がご専門で、現代における瞑想文化について研究されている東京大学中上淳貴氏も交え、パネルディスカッションを通して、空海の世界観を「瞑想」を中心に多角的に議論していきます。

「1200年後の世界」とのかかわり

人類の安寧はもちろんですが、その安寧を持続的に未来までつづけていくことがもっと大切です。人類に恩恵をもたらしてきた自然を単に利用するのではなく、人も自然の一部であり、自然のあらゆるものとの関係のなかで生かされているという“ところ”の気づきが重要です。そのような“ところ”は実は、私たちが奥底にもともとある“変わらないもの”のほずではないでしょうか。本来人がもつこの“ところ”に気づくことで、人間性、倫理性ある未来のすがたが、そしてなによりも未来を担う子供たちになにをすべきかが自ずと見えてくるものと思います。このような気づきをおこす活動をつなぎ1200年つづけていくことが大切です。

【ホスト & ゲスト】 神崎亮平(ファシリテータ)、松長潤慶、乾 龍仁、藤原和博、中上淳貴

クロージング&コンサート

日時：7月16日(日) 13時00分～15時00分 場所：高野山大学黎明館

オープニングアクト

(12時20分より黎明館ステージにて)

智辯学園中学校・高等学校 和太鼓部によるパフォーマンス

ホスト挨拶・総評

東京大学先端科学技術研究センター所長・教授 杉山正和

高野山宣言2023**クラシックコンサート**

【プログラム】

伊福部昭 『日本組曲』より 盆踊り

O.レスピーギ リュートのための古風な舞曲とアリア ほか

【出演】

演奏：東京フィルハーモニー交響楽団 弦楽アンサンブル

コンサートマスター：近藤薫

東京フィルハーモニー交響楽団コンサートマスター

東京大学先端科学技術研究センター特任教授



高野山会議2022コンサートの様子